

一一、馬頭觀世音の由來

トンネルを掘るには、崩した土砂や岩石——之を礮づと謂ひます——を坑外に運び出さねばなりません。此の運び出す作業、即ち礮出は、勞働者がウンサウンサとトロを押してもやれます。併しトンネルの長さがだんだん長くなつて礮の量がふへ、捨場の距離が遠くなると、人間の力でやつたのでは、間に合はなくなりまます。金も餘計掛りまます。だから何か人間より力のあるものを使はなければなりません。これには馬か牛の生物をつれて来て、手傳はせるのが一番簡單です。牛や馬なら人間よりは力が強く丈夫で、しかも文句を言ひませんから、餘計に仕事をさせられません。

丹那トンネルでも、初めの口付け時代には、人力でトロを押して、やりましたが、間もなく馬に代へることにしました。併し馬を使つて一番困ることは、馬が臆病な點です。殊に坑内の暗い處になると、馴れた奴でも、兎角物事に驚き勝て暴れ易く、その爲に能く足を折る奴が出来まます。馬も足を折つては商賣になりませんから、此奴はトロに積んで坑外に運び出して殺してしまひまます。已むを得ませんが、如何にも不憫です。いくら畜生でも一掬の涙なしにはと謂ひたくなります。三島口の鹿島組では、可なり長い期間、馬を使ひましたから、此の間に澤山の馬を犠牲にしました。礮出しの下請をやつて居つた川上氏はこれを見て、仕事の爲とは謂へ、餘りに可哀相だ、何とか馬の靈を慰めてやり度いと、考へた末、馬頭觀世音を建立して、供養をしてやりました。今の火藥庫のある山の下

にあるのが、それです。近頃は大大お詣りする人が多勢あります。それは家族が病氣のとき病氣が楽になり早く癒る様に祈るのですが、效驗があらたかの爲か、お供物を供へて、線香の煙のゆらゆらしてゐる日の方が多いやうです。三島口に停車場でも出来ましたら、もつと適當の場所に移す計畫も出来てゐるやうです。

馬はこんな工合で、兩口とも餘り、成績が思はしくないので、次は牛を使ふことにしました。牛は馬よりも力が強く、それに臆病ではありませんから、其の點は好都合です。此の馬や牛を使つた時代は、未だ坑内の明りはカンテラですから、手元以外は眞黒です。此の闇の中で圖體の大きい牛や馬と一緒に働くのですから時々間違ひが起ります。牛はトロを引いても、悠々と餘り音を立てず、暗闇から、のそりと出て來ますが、其の眼玉が異様に光つて、氣味の悪いものです。或る人夫などカンテラの燈だと思つて居ると兩眼を光らした大きな牛の頭が暗闇から突然眼前に浮び出たので、びつくりして、あわてゝ逃げ、大怪俄をした事もありました。そんなことから、牛の首に鈴をつけて見ましたが、牛が歩くとカランカランと鳴り、坑内から鈴音勇しく出て來る様は、一寸活氣もあり、乙な處もあつて、



牛の礮出し

しゝものでした。牛馬との暗闇生活で、一番困るのは、先生達の糞尿です。所きははずやるので、坑内は臭くなり、

足元がともすると亡つて危険です。此の時分の笑話です。三島口の組員の一人が、眞暗な中を、或る時切り擴げの上段から、手搜で降りて來て、大體此の邊が、支保工の「大引」だと思つて、ぐつと、つかまつて見ますと、何だか柔かで暖い、おかしいなと氣がつくと、馬の尻にしつかりつかまつて居たと謂ふナンセンスもありました。熱海の鐵道工業會社では、朝鮮牛の赤い奴でトロ三臺を引くのを使ひましたが、三島口の鹿島組では、丹波牛のトテツモなく大きい奴で、トロ十臺も引くのを使ひました。面白いことに、兩請負人の仕事のやりつぶりの違ふのが、こんな點にも表はれて居ます。

こんな工合で、牛馬の御厄介には大分なりましたが、結局技術的な動力の力を借りなければ、充分な仕事は出來ません。愈々牛や馬を免職して、電車運搬にしたのは、大正十年夏頃からでした。今日なら電氣工業も發達し、トンネル技術も進歩しましたから、こんな人から馬、馬から牛、牛から電氣と、まだるいことをやらずに、いきなり電氣を使ふでせう。併し當時としては已むを得なかつたのです。暗い地中のトンネル作業では、味もなく、臭もなく、形もない電氣の御厄介になるのが一番です。之れで礮出し作業も、本格的になつたのですが、馴れると云ふものは、おかしなもので、電車にした當時には、坑夫達のなかに、電車は早くていかんとか、トロの連結があぶないとか、不平を謂ふものがありました。こんな連中でも、まさか今日では牛や馬を使つて見る勇氣もありますまい。人間は兎角舊慣に惰して、新しきにつかないものです。しかし一旦移ると又すぐ馴染んでしまします。新調の靴が一寸はき悪いと謂つた工合なのでせう。